

国際移動とタイ社会の階層「タナ」を超えたアイデンティティ

ー在日タイ女性支援者たちの来日 30 年の生活経験から

International Migration and Reconstructing Identity by Overcoming Thai Social Class, so-called "*Ta-na*":

Through the 30-year Life Experiences of Thai Women Supporters in Japan

新倉久乃 NIIKURA, Hisano

和光大学(Wako University)

キーワード：社会階層「タナ」、ジェンダー化された定住、Thai Network in Japan¹、生活経験、多文化共生

1. はじめに 研究の背景と先行研究

タイから日本への国際移動は 1990 年代前半に来日のピークを迎え、女性は短期滞在の在留資格で就労する者や、国際結婚を通じて来日した者の中に人身取引被害者も含まれていた。当時、在留資格を得るのは日本人男性の妻である「日本人の配偶者」となる、ジェンダー化された定住であった。当時のタイ女性の多くは生活困窮家庭出身で、義務教育（小学 4 か 6 年）を修了し、家族の生活向上のために来日した。しかし、一部の女性は異なる階層に属し、日系企業で勤務して日本人男性と出会って婚姻、または留学という背景を持つものが存在した（Ruenkaew 2011）。在日タイ社会の階層は「タナ」（以降、「タナ」）と呼ばれ、出身、学歴、職業、地位が類似する各集団が出来上がり、タナによって生活様式や価値観が異なり交流は限られる。在日タイ社会のタナに関連する研究では、日本人家庭の安定した経済的基盤を持つことが「成功者のイメージ」としてタナの向上の目標となる一方、達成できなかった者が同国人社会から離脱する（新倉 2024）。タイ寺院に通う在日タイ女性は性産業に就く女性と自らを区別する倫理観を持ち、交流を避ける（Tosakul 2022）ことが明らかされた。

本研究で注目する生活経験による新たなアイデンティティの再構築については、在日コリアン女性の夜間中学や高齢者グループで、母国の家父長制や日本での差別経験を分析している（徐 2012、小松 2018）。この生活経験については、2007 年に設立した Thai Network in Japan (TNJ) というタイ人による支援ネットワークを対象に考察する。支援者たちは、タイと日本で経済的基盤の安定した家庭に属し大学や大学院進学、日系企業などでの就労経験を持つ。彼女たちは国際移動によって得た生活経験を通して、異なる「タナ」を超えた新たなアイデンティティを再構築した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、TNJ の女性支援者が、日本においていかなる生活経験を経て、「タナ」を超えて新たなアイデンティティを再構築したのかを明らかにすることである。生活経験として、来日の経過、妻や母親としての経験、日本語の習得、相談員として日本の自治体や NGO との協働、相談者から得た気づき、タイ大使館での役割に注目する。この研究は、国際移動先のホスト国でマイノリティであり女性であるという交差性のもと、女性たちのアイデンティティの再構築を日本の社会構造、特にジェンダーや移民政策の視角から分析するものである。

3. 対象と調査方法

調査協力者は 1980 から 1990 年代に来日し、現在 50～70 代の同国人支援経験を持つ 6 人の在日タイ女性である。タイ社会の階層について横浜市内のタイ寺院の僧侶 2 人にインタビューをした。母国では安定した

¹ Thai Network in Japan <https://tnj.jimdofree.com/> (2025 年 8 月 20 日最終アクセス)

経済基盤を持ち高学歴という、いわゆる上位のタナに属する TNJ 設立時のリーダー3 人には in-depth インタビューをした。また、タイ人の食事会、タイ寺院の法要、役所や病院への同行、TNJ の研修会で参与観察を行った。調査期間は 2020 年 10 月から 2021 年 5 月、2023 年 9 月から 10 月、2024 年 8 月から 6 月である。

4. 事例および考察

TNJ のリーダー3 人のインタビューをもとに以下の 3 点を考察する。第 1 は、日本人というマジョリティの中で、高学歴であっても日本社会への適応や言語の習得、自分の能力を生かせないマイノリティとしての体験をする。第 2 は、日本の NGO や自治体と協働して、同国人の労働や福祉問題の解決する役割から、同国人の在留資格による人権の制限や稼得責任を担うタイ女性のジェンダーについて再認識する。相談の場で出会った同国人は、女性たちにとってこれまで交流がなかった「タナ」に属する人たちであった。第 3 は、タイ政府と日本政府の政策のもとで担う役割である。タイ政府の人間の安全保障に基づく邦人保護政策の担い手としての TNJ、そして日本政府の多文化共生政策による自治体での通訳、多言語相談員である。この 3 点がどのように関連し交差し、「タナ」を超える新しいアイデンティティの再構築に繋がったのか、女性たちの生活経験を外国人政策とジェンダーの視角から分析する。

5. まとめ

支援者となった在日タイ女性にとって国際移動によって得た生活経験を、上記の 3 点から分析し 3 つの知見を得た。一つめは、経済的に安定し高学歴なタイ女性であっても、同時代の国際移動の中では外国人というマイノリティで、かつ女性である、所属するタナに無関係な日本の家庭内ジェンダー関係、社会的制限に遭遇するというポジショナリティの共通点を見いだした。二つめは、これら女性たちは TNJ に属し、日本の自治体や NGO で働き同国人を支援する役割を果たした。その過程で同国人の労働者としての権利侵害、人身取引被害女性が担うタイの家族内のタイ女性の稼得責任に直面する。日本での官民協働の支援に立ち会い、困難を抱えた同国人に一番近い場所でその権利回復を体験した。三つめは、日本とタイの行政組織の橋渡しというポジショナリティによって、タイ人女性としてのアイデンティティを複眼的にみる体験である。日本の多文化共生政策のもとでは、自らもマイノリティであるというアイデンティティを獲得する。同時に、タイ政府の人間の安全保障に基づく邦人保護政策のもとでは、タイ政府に対してマイノリティとしてのタイ人の代弁者としての新しいアイデンティティが芽生えた。この新しいアイデンティティ再構築は、日本の多文化共生政策が同国人のほぼ無償の善意の上に成り立つという限界も表している。本研究は、日本人側からは見えにくい、国際移動の中で外国籍コミュニティの内部で異なるタナを超える新しいアイデンティティの再構築という肯定的な側面と、同時に多文化共生政策の限界を可視化することに貢献するものである。

【参考文献】小松恵,2018 「高齢期における在日コリアンのアイデンティティと生活経験—川崎ふれいあい館の取り組みから—」『社会学研究科年報』第 25 号：51-60. 徐阿貴,2012 『在日朝鮮人女性による「下位の抵抗的な公共圏」の形成—大阪の夜間中学を核とした運動』, 御茶ノ水書房. 新倉久乃,2024 『在日タイ女性の高齢期と脆弱性—トランスナショナルな社会空間と埋め込まれたジェンダー規範』, 明石書店.

Ruenkaew, Pataya, 2011, “Thai Female Migration to Japan: Flows and Consequences,” *Kyoto Working Papers on Area Studies*, No.108 (G-COE Series 106), Center for Southeast Asian Studies Kyoto University. Tosakul, Ratana, 2022, “Female Thai Migrants in Japan and Their Claims of Morality”, 『人文学報』No.518-2 (社会人類学分野15) 東京都立大学人文科学研究科：99-122.